

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2017/9/3	
所属部局・職	野生動物研究センター・博士課程学生
氏名	榊原香鈴美

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
日本、東京
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
KOUDOU2017 での映像発表
3. 派遣期 (本邦出発から帰国まで)
平成 29 年 8 月 29 日～9 月 1 日 (4 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
—
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
<p>写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。</p> <p>8月30日～9月1日に開催された KOUDOU2017 大会にて『ドローンを用いた三角西港のスナメリ観察』と題して日本動物行動学会の映像発表部門で 15 分の発表をおこなった。KOUDOU2017 は、日本動物行動学会第 36 回大会、日本動物心理学会第 77 回大会、応用動物行動学会/日本家畜管理学会 2017 年度の秋季大会、日本行動神経内分泌研究会第 27 回大会の合同大会として東京大学駒場キャンパスにて開催された。私が所属する日本動物行動学会からは今回 180 名の参加者がいたそう。4 学会の合同大会は 2011 年の Animal2011 以降 6 年ぶりで、本大会では合同シンポジウムや4つの学会コラボシンポジウムなどが開かれたり、ポスター発表も発表者の五十音順で並びが決められなるべく分野を超えた交流、活発な意見交換をすることが期待されていた。ポスターの件数だけでも 266 件と多かったが、コアタイムを2日に分けて1時間半ずつ設定していたことで、かなり多くの発表者から直接話を聞くことができたと思う。話を聞く中で飼育、ないし実験下の研究と野外観察では研究のアプローチがそもそも大きく異なることを実感したが、ひとつの問題として大きくとらえた時にさまざまな方向から答えが出ることで、より体系的に、そしてメカニズムから機能まで類似する部分が多いということが明らかになると、生物種間で共通する事象としてとらえられると感じた。野外観察の行動学分野では、実験下のように統制できない影響を想定してその発生の要因を明らかにしなくてはならない。それらの課題を解決するような分析手法に関する発表もあり、その分析手法さるものながら研究に至った経緯が非常に驚いた。P-36 の北海道での害虫ナメクジの発生要因をベイズ統計で明らかにした研究であったが、なんとそのデータを取ったのはその地域で散歩が日課になっている住民だという。散歩中に発見したナメクジの数をノートに記録し、さらに気象センターが近いということでその日の天気についても記録をしていたらしい。日常の生活でみられる不思議な現象を地道に記録し続けた功績と、数多の変数を入れて要因を検討していく統計技術と専門知識がタッグを組んでひとつの研究になったというのは、捉えようによっては合同大会にふさわしい共同の形の研究であると感じた。このようにデータを取る人と分析する人が必ずしも一緒である必要はなく、例えば野外観察の中で一緒にホルモンなどの生理指標となるものを採取してきて、共同研究者らと一緒にそれらに取り組むという形がもっと増えたらいいと感じた。個人的に興味を惹かれる分野はやはり行動学分野が多かったが、行動の刺激となるフェロモンの作用過程やそれらを受容したあとの神経系の働きなど、議論に混じれるほどの知識がないのが残念だったがひとつの教養として身についたと思う。同学年の学生が名だたる教授陣と肩を並べて合同シンポジウムで講演していたことも非常に刺激的だった。自身の発表は最終日の最終枠に設けられていたが、多くの人が聞きに来てくれた。発表後の質疑の時間を十分に残せなかったことだけ悔やまれるので、時間は発表練習をもっと念入りにやりたいと思う。</p>

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



6. その他 (特記事項など)

今回発表の機会を与えてくださった森村成樹さんをはじめ、共同研究者の森祐介さんに感謝いたします。